

学校いじめ防止基本方針

鳴門市鳴門中学校

1 いじめの防止等に関する基本的な考え方

- (1) 教育活動全体を通じ、全ての生徒に「いじめは決して許されない」ことへの理解を促し、生徒の豊かな情操や道徳心、自分の存在と他人の存在を等しく認め、お互いの人格を尊重し合える態度など、心の通う人間関係を構築する能力の素地を養う。
- (2) いじめはどの子供にも起こりうることを踏まえ、全ての生徒をいじめに向かわせることなく、成長を支え、問題を未然に防ぐために全ての教職員が取り組む。
- (3) ささいな事象であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階から複数の教職員で的確に関わり、いじめを隠したり軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知する。
- (4) 発見・通報を受けた場合には、特定の教職員で抱え込まず、速やかに組織的に対応し、被害生徒を守り通すとともに、教育的配慮の下、毅然とした態度で加害生徒を指導する。
- (5) より多くの大人が子供の悩みや相談を受け止めることができるようにするため、学校と家庭、地域が組織的に連携・協働する体制を構築するとともに、適切に情報共有を図る。
- (6) いじめる生徒に対して必要な教育上の指導を行っているにもかかわらず、その指導により十分な効果を上げることが困難な場合などには、関係機関（警察、児童相談所等）との適切な連携を図るとともに、平素から、学校と関係機関の担当者との情報共有体制を構築する。

2 学校いじめ対策組織

(1) 組織の構成

管理職や主幹教諭、生徒指導担当教員、教育相談担当教員、学年主任、養護教諭、学級担任、教科担任、部活動指導に関わる教職員、学校医等により構成する。個々のいじめの防止・早期発見・対処に当たっては、教育相談コーディネーター、副担任等、生徒と関わりのある教職員、生徒が相談しやすい教職員等を追加する。

また、心理、福祉等に関する専門的な知識を有する者等の助言を得る。

(2) 組織の役割

- ① 学校基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正を行う。
- ② 生徒・保護者や教職員からのいじめの相談・通報の窓口となり、報告を受ける。
- ③ いじめの疑いに係る情報や生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、共有を行う。
- ④ 緊急会議を開いて、いじめの情報の迅速な共有、関係のある生徒への事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定と保護者の連携を行う。

3 教育相談体制

- (1) 教員と生徒及び保護者、さらには生徒間の好ましい人間関係の醸成に努める。
生徒の個人情報に配慮するとともに、教員に相談すれば、秘密の厳守はもとより、教員は必ず自分を助けてくれるという安心感や信頼感の醸成に努める。
- (2) 定期的な教育相談週間や相談日程を設定するなど、生徒はもとより、保護者も気軽に相談できる体制を整備し、保護者からの相談を直接うけとめられるようにする。
- (3) 相談の内容によっては指導を継続し、必要に応じて医療機関等の専門機関との連携を図る。

- (4) 生徒や保護者に対して、広く教育相談が利用されるよう、学校の内外を問わず多様な相談窓口について広報・周知に努める。

4 いじめの未然防止のための取組

(1) 教育・指導場面

- ① 「いじめは人間として絶対に許されない」との強い認識を、学校教育全体を通じて、生徒一人一人に徹底する。
- ② 教育活動全体を通じた道徳教育や人権教育の充実、読書活動・体験活動などの推進により、生徒の社会性を育むとともに、幅広い社会体験・生活体験の機会を設け、他人の気持ちを共感的に理解できる豊かな情操を培い、自分の存在と他人の存在を等しく認め、お互いの人格を尊重する態度を養う。
- ③ 全ての生徒が心の通じ合うコミュニケーション能力を育み、規律正しい態度で授業や行事に参加・活躍できる授業づくりや集団づくりを行う。
- ④ 授業についていけない焦りや劣等感などが過度なストレスとならないよう、一人一人を大切にしたり分かりやすい授業づくりを進める。
- ⑤ ストレスを感じた場合、それを他人にぶつけるのではなく、運動や読書などで発散したり、誰かに相談したりするなどストレスに適切に対処できる力を育む。
- ⑥ 学校の教育活動全体を通じ、生徒が活躍でき、他者の役に立っていると感じることでできる機会を全ての生徒に提供し、生徒の自己有用感が高められるよう努める。また自己肯定感を高められるよう、困難な状況を乗り越えるような体験の機会などを積極的に設ける。
- ⑦ 学級活動や道徳の時間に、いじめに関わる問題を取りあげ、いじめは人権侵害であり、絶対に許されない行為であることを毅然と指導する。
- ⑧ インターネット上に他人を誹謗・中傷する情報を発信することは「いじめ」であり、決して許される行為ではないことを生徒に徹底するとともに、インターネットを通じて送信される情報の特性に関する学習や情報モラル教育について学校全体で取り組む。また、県がネットパトロールを実施していること、インターネット上の写真や文書は消去が困難であること、刑事罰や民事罰等が適用される場合があることにも触れて指導を行う。
- ⑨ 「いじめ防止子ども委員会」を通じて、生徒自身の主体的な参画によるいじめ問題への取組が促進されるよう適切な指導や助言を行う。
- ⑩ 生徒の言葉や態度及び遊び等に注意を払い、不適切な場合は指導する。
- ⑪ 教職員の言動が、生徒を傷付けたり、他の生徒によるいじめを助長したりすることがないように、細心の注意を払う。
- ⑫ いじめが解決したと見られる場合でも、継続して十分な注意を払い、再発の可能性を踏まえ、日常的に注意深く見守る。
- ⑬ 生徒が被災し、避難所に避難した場合でも、お互いが協力し合い、支え合う人間関係を築くことができる力を育てる。
- ⑭ 「おごり」という名目で「ゆすり」・「たかり」が行われている場合があるため、地域や保護者と連携し、生徒の行動や交友関係を把握し適切に対応する。

(2) 家庭・地域社会との連携

- ① 学校いじめ防止基本方針や指導計画をホームページ等で公表し、学期の始期、入学式等で生徒や保護者や地域住民の理解を得るよう努める。
- ② 家庭や地域社会と連携して、いじめ問題の解決を進める姿勢を示すとともに、必要に応じて警察・児童相談所との円滑な連携や情報の共有を図る。

- ③ P T Aや地域の関係団体とともに、いじめ問題について協議する機会を設け、いじめの根絶に向けて、地域ぐるみの対策を推進する。

5 早期発見・早期対応の在り方

- (1) 各学期の始業式及び入学式等において、すべての生徒や保護者に対して、いじめを許さない学校の取組や、いじめられている生徒を全力で守りぬくことを明らかにし、生徒や保護者が学校を信頼し、安心していじめ等の相談をできるよう働きかける。
- (2) 「いじめ発見のための観察ポイント（教員用）」等を使用しつつ、日常的にいじめの発見に努め、生徒が発する危険信号を見逃さず、その一つ一つに的確に対応する。
- (3) 全生徒を対象としたいじめ発見のための「アンケート調査」を定期的（6月、9月、12月）に実施することに加え、「個別面談」や「生活ノート」の記述等から、学校いじめ対策組織において組織的に判断する。また、いつでもいじめ等の悩みを相談できるよう、「いじめホットライン」等、子どもの相談窓口の周知を行う。
- (4) いじめの把握にあたっては、教育相談担当教諭、養護教諭、スクールカウンセラー、特別支援コーディネーター等、学校内の専門家との連携に努める。特に、けんかやふざけ合い、けが等にも留意し、背景にいじめがないか確認する。
- (5) 生徒に絶えず声かけを行い、生徒が日常使っている言葉や態度、遊び等に注意を払うとともに、気付いたことについて教職員の情報交換を密に行う。
- (6) 生徒が欠席や遅刻をしたり、けがをしていたりした場合は、必ずその理由を確認し、保護者と連絡を取る。
- (7) いじめについて訴えや情報があった時は、問題を軽視することなく、保護者や友人関係等からの情報収集を通じて事実関係を正確に調査し、いじめを認知した場合は、速やかに市町村教育委員会に報告し、適切な連携を図る。
- (8) 保護者に対して、「いじめ発見のための観察ポイント（保護者用）」を配布するなど、いじめ問題への関心をもってもらい、保護者からの情報提供を促す。
- (9) 校内で問題行為が発生した際、その行為が犯罪行為（触法行為を含む）に該当する場合については、早期に警察に相談又は通報を行う。そのため、いじめか否かという判断とは別に、行為自体が犯罪行為にあたる可能性を視野に入れて対応する。

6 いじめへの対処

- (1) いじめの発見・通報を受けたときの対応
 - ① いじめの訴えや情報及び兆候等があった時は、管理職の指示のもと、問題を軽視することなく、正確かつ迅速に事実関係の把握を行う。
 - ② 学校いじめ対策組織において、速やかに関係生徒等から事情を聴取するなど必要な調査を実施するとともに、認知したいじめへの対応方針を決定する。
 - ③ 職員会議等を通じて、いじめの情報を共有し、対応方針について全教職員の共通理解を図る。
 - ④ いじめられた生徒、いじめた生徒への具体的な支援や指導について、教職員一人一人の役割分担を明確化し、組織的に対応するとともに、保護者に対して適切に情報提供を行い、連携・協力を図る。
- (2) いじめられた生徒、保護者への支援
 - ① いじめられた生徒を徹底して全力で守り抜く。
 - ② いじめられた生徒が安心して教育を受けられるようにするために必要な措置を講ずる。

- ③ 複数教員による家庭訪問を行う。
- ④ 本人や保護者に必要な情報を適切に提供する。
- ⑤ 本人や保護者の気持ちに寄り添い、要望や相談には適切に対応する。
- ⑥ スクールカウンセラーの活用等、専門家による継続的な心のケアに取り組む。
- ⑦ 特に配慮が必要な生徒の指導については、日常的に当該生徒の特性を踏まえた適切な支援を行い、周囲の生徒に対する必要な指導を組織的に行う。

(3) いじめた生徒への指導と保護者への助言

- ① 毅然とした対応と粘り強い指導を通じて、行為に対する十分な反省を促す。
- ② いじめられた生徒を守る観点から、必要に応じて別教室等での学習を行わせる。
- ③ いじめの背景を考え、行為に対する責任を明確にし、再発防止に努める。
- ④ 複数教員で家庭訪問を行い、保護者に説明を尽くし、理解と協力を求める。

(4) 他の生徒への指導

- ① 新たないじめを防止するための指導の徹底を図る。
- ② 傍観者や取り巻きもいじめを助長していることを理解させ、「いじめは人間として絶対に許されない」との意識を徹底させる。
- ③ 生徒自身の主体的な参画によるいじめの問題への取組促進などにより、いじめを許さない学校づくりを進める。

(5) 教育委員会等への報告と連携

- ① いじめを認知した場合は、学校長が速やかに市町村教育委員会に報告し、適切な連携を図るとともに、いじめられた生徒を守る観点から、必要に応じて出席停止措置の適用を要請する。
- ② 事案によっては、県教育委員会と連携し、阿波っ子スクールサポートチームや学校問題解決支援チーム、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の派遣を要請し、外部専門家の力を借りて対応する。

(6) 関係機関への相談・通報

- ① 恐喝、暴行、傷害等の犯罪行為として取り扱われるべきと認められる事案は、ためらうことなく早期に警察に相談し、警察と連携した対応を取る。
- ② 生命又は身体の安全が脅かされるような場合には、直ちに警察に通報する。
- ③ ネット上のいじめが行われた場合、いじめに係る情報の削除依頼や発信者情報の開示請求について、必要に応じて警察や法務局に協力を求める。

(7) いじめの解消状態

少なくとも、次の二項目が満たされていること。ただし、再発の可能性を踏まえ、日常的に注意深く見守る。

- ① 少なくとも3ヶ月間を目安とする。学校いじめ対策組織において、より長期な期間を設定する。
- ② いじめを受けた生徒が、心身の苦痛を感じていないこと。組織医院で面談等を実施する。

7 校内研修

校内研修（事例研究やロールプレイ）の計画を作成し、年に1回以上、いじめを始めとする生徒指導上の諸問題に関する校内研修を行う。

8 重大事態への対処

- (1) いじめにより、生徒の生命、心身又は財産に重大な被害が生じたり、相当の期間学校を欠席することを余儀なくされたりしている疑いがあると認めるとき、事実確認の結果を直ちに市町村教育委員会に報告するとともに、市町村教育委員会と連携して対処する。
- (2) 重大事態が生じ学校が調査主体になるときは、「重大事態への対応マニュアル」(別表)に従って、迅速かつ丁寧な調査を行う。

9 取組の評価

- (1) いじめ問題への取組等について、学校評価と教員評価の項目に位置付け、達成目標設定とその達成状況の評価をする。
- (2) PDCAサイクルの考え方に従い、年間計画で決めた期間の終わりには、「取組評価アンケート」等を実施し、その結果を踏まえてその期間の取組が適切に行われたか否かを検証する。
- (3) 期待するような指標等の改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、次の期間の取組内容や取組方法の見直しを行う。

10 年間計画 (いじめ防止プログラム)

年間目標

- ・ いじめは、どの子供にもどこの学校でも起こり得ることを踏まえて、いじめ問題に対して積極的に認知し組織的に取り組む。
- ・ 生徒の生活態度・意識を向上させるとともに、適切な人権意識を身に付けさせ、いじめの未然防止を図る。
- ・ 生徒の心の変化をいち早く捉え、いじめの早期発見・早期対応に努め、人間関係の修復・改善を図る。

	内 容	対象者	担 当
4月	学校基本方針の共通理解 指導体制や指導計画の公表・周知 個人面接 二者面談	教職員 教職員・児童生徒・保護者 生徒(全学年) 生徒・保護者	生徒指導主任 ” ” 教務主任
5月	校内研修(問題行動の共通理解) PTA総会 徒歩遠足 愛校作業 運動会	教職員 保護者 生徒(全学年) 生徒・保護者 教職員・生徒・保護者	生徒指導主任 教頭・教務主任 教頭・教務主任 教頭・教務主任 体育主任
6月	1学期中間テスト 交通安全教室(1年) 市総体	生徒 生徒(1年生) 生徒(全学年)	教務主任 安全教育主任 体育主任
7月	夏季休業開始 県総体 職場体験活動(2年生) 三者面談	生徒(全学年) 生徒 生徒(2年生) 生徒・保護者	教務主任 体育主任 教務・学年主任 教務主任

8月	夏季休業 四国総体 防犯弁論大会 授業再開	生徒（全学年） 生徒 生徒（全学年） 生徒（全学年）	教務主任 体育主任 生徒指導主任 教務主任
9月	鳴中祭 1学期末テスト 避難訓練	生徒（全学年） ” ”	特別活動主任 教務主任 安全教育主任
10月	1学期終業式 2学期始業式 中教研教科外研究大会 第1回基礎学（3年生） 市中駅伝大会 徳島県ステップアップテスト 修学旅行	生徒（全学年） ” 生徒（該当学級）・教職員 生徒（3年生） 生徒 生徒（1・2年生） 生徒（2年生）	教務主任 ” 教務主任 教務主任・学年主任 体育主任 教務主任 校長・学年主任
11月	第2回基礎学（3年生） 人権フェスティバル・授業参観 鳴人研	生徒（3年生） 生徒・保護者 教職員・生徒	教務主任・学年主任 教頭・教務主任 人権教育主事
12月	生徒会役員選挙 冬季休業開始 教育相談	生徒（全学年） ” 生徒・保護者	特別活動主任 教務主任 ”
1月	授業再開 第3回基礎学（3年） 入学説明会	生徒（全学年） 生徒（3年生） 児童（小学6年）・保護者	教務主任 教務主任・学年主任 教頭・教務主任
2月	高校特色選抜 卒業テスト 進路相談 基礎学（1・2年生） 大研（人権教育）	生徒（3年生） ” 生徒（3年生）・保護者 生徒（1・2年生） 生徒（該当学級）・教職員	教務主任・学年主任 ” ” ” 人権教育主事
3月	高校一般選抜 学年末テスト 卒業式 修了式・離任式 春季休業開始	生徒（3年生） 生徒（1・2年生） 生徒（3年生） 生徒・教職員 生徒（1・2年生）	教務主任・学年主任 ” 教頭・教務主任 ” ”

重大事態への対応マニュアル（鳴門中学校）

★いじめ事案発生★

（１） 組織員の構成

① 既存の学校いじめ対策組織

調査組織の構成：（校長・教頭・養護教諭・教務主任・生徒指導主任・学年主任）

② 外部人材を加えた組織

調査組織の構成：（スクールカウンセラー・青少年補導センター職員・少年補導職員・学校医等）

（２） マスコミへの対応

窓口の一本化と正確な情報と丁寧な対応（対応者：教頭）

I 重大事態の発生（疑いを含む）

II 所管教育委員会に報告する（学校又は学校設置者のどちらかが主体になるかを判断）

III 重大事態の調査組織を設置する（学校が調査の主体になった場合）

・ 公平性，中立性が確保された組織が，客観的な事実確認を行う。

・ 被害児童生徒・保護者に調査等の事前説明を行う。

・ ①又は②のどちらが調査の主体となるかを決定する。

① 既存の学校いじめ対策組織に適切な専門家を加えた調査組織

② 調査を行うための第三者組織（スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・精神科医等）

IV 被害児童生徒・保護者への調査方針の説明や情報提供を行う

・ 調査前に被害生徒，保護者に①から⑥を説明する。

・ 被害生徒・保護者に寄り添った対応を第一とする。

・ 加害生徒・保護者にいじめの事実関係についての調査結果の説明を行う。

① 調査の目的・目標

② 調査主体

③ 調査時期・期間

④ 調査項目

⑤ 調査方法

⑥ 調査結果の提供

V 調査組織で，事実関係を明確にする調査を実施する

・ いじめの事実関係を明確にする。（因果関係の特定ではなく客観的な事実関係を調査）

・ 学校で実施した調査の再分析や新たな調査を実施する。（文科省「背景調査の指針（改訂版）」を参照）

① 文書情報の整理

② アンケート調査の実施（詳細調査の実施P 17）

③ 聞き取り調査の実施（詳細調査の実施P 18） → 時系列にまとめて分析する

④ 情報の整理（詳細調査の実施P 19）

VI 調査結果を所管教育委員会に報告する

VII 調査結果を基に必要な措置を講ずる

- ・被害生徒に対して、事情や心情を聴取し、状況に応じて継続的にケアを行う。
- ・被害生徒が不登校になっている場合は、学校生活への復帰に向けた支援活動を行う。
- ・再発防止策を検討する。（詳細調査の実施P 2 0）
- ・報告書の取りまとめをする（詳細調査の実施P 2 0）